連載第４回

# 「上手くいく事業承継のコツと陥りやすい誤解」

中小企業基盤整備機構
北海道支部 事業承継コーディネータ
吉川　孝

命尽きる寸前まで力を使い切ってからではなく、余力を残した状態で後継者にタスキを渡せればいい

## 第二章 トップの責任②
## 余裕もってタスキを渡す

事業承継は特別なことではありません。経営が苦しかろうが将来に対する不安があろうが、いずれ必ず取り組まなくてはならない当たり前の問題です。

今どき経営的な悩みが何もない会社などありません。自分の代で会社を清算すると決めている場合を除いて、経営者が60歳を超えようとしている企業は決して避けては通れない共通の課題と言えます。

人間は「生老病死」から逃れられません。どんなに立派な経営者でも年齢を重ねるとともに元気を失い、病にかかってやがては亡くなります。自分の気力・体力・生命と一緒に事業や会社が失われてもかまわないと考えている人は1人もいないでしょう。

ある人が「事業承継は駅伝のようだ」と言っていました。次の世代にタスキを渡す使命を背負っているところは確かに同じです。

しかし違う点が1つあります。それは「命果てる寸前まで力を使い切ってはならない」ということ。次の世代にタスキを渡したとたん、先代がバタリと倒れては後継者と周りの人が困ります。42・195㎞を走り切った後も平然と談笑しながら歩いているマラソンランナーのようでなくては。

「あと10㎞走りたいけれど、ここから先はお前に任せた」。そんなタスキの渡し方が出来ればいいと思います。

## 後継者育成はトップの使命

昨年12月に京都で開催された事業承継学会第1回大会で大勢の老舗の経営者にお会いしました。出席者の1人から「創業100年くらい会社はまだまだ子供みたいなものだ」と言われて少々とまどいましたが、興味深い話をたくさん聞くことが出来ました。

ある会社の80代の会長はご自身が8代目。現在は息子が社長、孫に当たる常務が10代目といいます。北海道の人間から見れば気の遠くなりそうな話です。その方が昔コンサルタントから「事業で成功しただけではせいぜい50～70点、後継者を育てて上手に継いではじめて100点満点」と言われたそうです。

また、近江商人の世界では一族の中から後継者が現れないのは非常に不名誉なこと。「あの家では息子を後継ぎにふさわしい人間に育てられなかった」と受け止められます。まさに事業承継自体が文化。一族の中で後継者を育ててきたことが家の誉れであり、そうして受け継がれてきた会社が隆盛を極めるのがあるべき姿という考え方なのでしょう。

北海道では親族内承継をしないことはそれほど珍しくありません。「世襲はしない」ことをむしろ誇らしげに語る経営者にもよくお会いします。

「文化が違うんだな」とつくづく感じましたが、次世代のリーダーを育てる責任がトップにあることだけは間違いありません。

◆お知らせ◆

中小企業基盤整備機構北海道支部では、事業承継コーディネータによる事業承継の無料相談を行っています。

■場所　札幌市中央区北２条西１丁目1-7
　　ＯＲＥビル６階
■日時　毎週水曜日の午後１時～午後５時
■予約・連絡先（経営支援課）
　　☎011-210-7471・FAX011-210-7481
　　E-Mail hokkaido5@smrj.go.jp